

平井雄一郎・高田知和 編

記憶と記録のなかの 渋沢栄一



Baron Shibusawa's Triple Faces

法政大学出版局

平井雄一郎・高田知和 編

記憶と記録のなかの 渋沢栄一



編者紹介

平井雄一郎（ひらい ゆういちろう）

1963年生まれ。東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程単位取得満期退学。渋沢研究会会員（日本近現代史、歴史学）。主な業績：『宮川量と桜井方策、二つの「日本癩病史」——「現場」の「当事者」によるハンセン病史叙述を考える』『国立ハンセン病資料館研究紀要』第3号，2012年，「『帝都物語』と二つの「都市史」——劇映画による歴史叙述の転義法』『歴史評論』第753号，2013年ほか。

高田知和（たかだ ともかず）

1962年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。東京国際大学人間社会学部教授（社会学）。主な業績：『牛久市史近現代Ⅱ』（共著）牛久市，2002年，『財団法人埼玉学生誘掖会百年史——ある学生寮と寮生の青春譜』（共著）埼玉学生誘掖会，2004年，『社会学が拓く人間科学の地平——人間を考える学問のかたち』（共著），五紘舎，2005年，『組織と情報の社会学』（共著）文化書房博文社，2007年ほか。



記憶と記録のなかの渋沢栄一

2014年8月18日 初版第1刷発行

編者 平井雄一郎・高田知和

発行所 一般財団法人 法政大学出版局

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-17-1

電話 03(5214)5540／振替 00160-6-95814

印刷：三和印刷，製本：誠製本

装幀：秋田公士

©2014 Yuichiro HIRAI, Tomokazu TAKADA

Printed in Japan

ISBN 978-4-588-32705-6

記憶と記録のなかの渋沢栄一／目次

序「渋沢栄一」という「意味」への招待……………	平井雄一郎	1
-------------------------	-------	---

第Ⅰ部 「渋沢栄一その人」から「渋沢栄一像」へ

渋沢敬三による渋沢栄一の顕彰……………	鶴見太郎	19
方法的な側面から……………		
近代日本における「実業」の位相……………	佐藤健二	47
渋沢栄一を中心に……………		
郷里からみた渋沢栄一……………	高田知和	75
歴史と地域社会の一側面……………		

第Ⅱ部 「渋沢栄一像」、その生成・展開・変遷

*銅像・置物……………		
二五人の渋沢栄一……………	木下直之	109
銅像からゆるキャラまで……………		
*肖像写真・肖像画……………		
渋沢栄一、流通する肖像……………	菊池哲彦	151
*伝記・歴史小説……………		
渋沢栄一の「事実／真実」から「存在の謎」へ……………	平井雄一郎	185

*新聞・雑誌・ネット

イメージの収斂と拡散……………中村宗悦
多様化するメディアと渋沢像……………213

第III部 渋沢栄一をめぐるアーカイブズの過去・現在・未来

ブリコロールへの贈り物ができるまで……………山田仁美
『渋沢栄一伝記資料』生成の背景……………245

『渋沢栄一伝記資料』を紙から解き放つ……………小出いずみ
……………275

渋沢史料館というテクノロジー……………井上潤
……………305

渋沢栄一、九一年の生涯——井上潤……………323
あとがき……………331

索引

序 「渋沢栄一」という「意味」への招待

平井雄一郎

一 「渋沢栄一」とは誰か？

一九八八年に公開された映画『帝都物語』は、「明治四十五年／東京」というテロップのもと、一人の老人が供の者を従え、杖をつきながら、東京・下町の風景を広く遠く見はるかすことのできる丘へと続く道を、しっかりと踏み固めるような足どりで登ってくる場面で幕を開ける。老人は、やや小柄ながらも恰幅のよいその身体を紋付羽織袴につつま、また無精髭をゆたかにたくわえてもいる。丘の頂きでは陰陽師の集団が待ちかまえており、彼らは老人をそこで恭しく迎えると、歓待の儀式のごとく、不可思議な響きの呪文を詠唱しはじめる。するとそれに呼応して丘の地面が割れ、そこから、妖気を漂わせた煙と光が迸りでてくる……

映画のオープニングクレジットに先立つ、このスペクタクルな〈出来事〉の叙述において老人は、陰陽師のリーダーから「渋沢翁^{シヅサワオウ}」と呼ばけられている。だが、その呼びかけをのぞけば、老人の正体に関連する情報は提供されない。いや、情報が「渋沢翁」だけであるのは、二時間半後、エンディングクレジットのトップに「（出演）渋



映画『帝都物語』の渋沢栄一（勝新太郎）

©キネマ旬報社

沢栄一「勝新太郎」という文字があらわれるまで、一貫してそうである。仮にもし、予備知識なしで『帝都物語』に接したとすれば、丘の上の〈出来事〉を起点として、さらなる〈出来事〉群が連鎖し構成されていく、映画の〈物語〉全体を理解することは困難であろう。もちろん、そのような条件の映画鑑賞者は現実にはまずいない。私たちは、ある映画を鑑賞するに際して、その映画についてのさまざまな情報——ストーリー、キャスト、スタッフなど——を、さまざまなメディアを通じて、能動的にも受動的にもすでに得てきているのが通常である。『帝都物語』のように実在した「歴史」を参照している作品であれば、すでに鑑賞者の方で、参照された「歴史」そのものについての情報を参照している可能性があらうし（ネット社会の現在であれば鑑賞中にグーグル検索をすることも可能だ）、そもそも渋沢栄一についての知識や関心を予め有していたことが鑑賞の動機となったのかもしれない。つまり、「渋沢翁／シブサワオウ」のよびかけだけでこの〈物語〉を暗黙に理解しうるのは、参照と参照とがときからみ合う、渋沢栄一をめぐる情報のネットワークのうちに私たちが知らず取り込まれているからである。

そうしたネットワークの中心点から発信される、私たちに

最も親しみやすく、最も明快な情報とは、言うまでもなく「日本資本主義の父」、これであろう。たとえば、最新の歴史辞典で「渋沢栄一」の項目を繙くと、「明治・大正・昭和にわたる実業界の代表的指導者」¹⁾とある。また、ネット上のいわゆるオフィシャルサイトもない時代、劇場販売のパンフレットは、一般商業映画の公開時における随一の公的なテキストであったはずだが、『帝都物語』のそれには、「日本を代表する実業家・渋沢栄一」という文言が見える。「実業家」とは、「商工業・金融などの事業に携わる人」(『広辞苑』)である。国家の発展とその社会における営利ビジネスの発展とが相即不離の関係にあった時代のうちに切り取られた「日本」、その「日本」を代表する人物であるから、渋沢栄一はまぎれもなく「日本資本主義の父」にほかならない、ということである。

ところで、そのように定式化された情報は、アカデミズムの言説、『帝都物語』のようなサブカルチャーの言説、さらには第三極ともいべきジャーナリズムの言説——これについては本書所収の中村宗悦論文において詳細に論じられている——などによって枠付けられることにより、選択的に指定されてきたものと言え換えられよう。言説群の折り重なりの上に成り立つ選択的指定それ自体が歴史的なプロセスである。してみると、私たちの前には、渋沢栄一についての二つの史実が横たわっていることになる。

まず一つは、渋沢栄一という物質的存在がかつて・あった、ということ。狭義の「史実」である。そしてもう一つは、私たちが、かつて・あった渋沢栄一という物質的存在と、いま・あるさまざまな媒体——書物、映画、ネット、その他なんでもよい——の中で再・現前化^{リプレゼン}されている「渋沢栄一」とのあいだに、たしかな連続性、あるいは同一性らしきものを認めてきた、ということ。これはいわば「メタ史実」である。実際の渋沢は、公的な場では和服よりも洋装を好み、常に髭を綺麗に剃りあげ(本書所収の菊池哲彦論文を参照されよ)、また、徹底した合理主義者であったがゆえにおそらく陰陽師などの神秘主義・オカルティズムは嫌悪していた——彼のそうしたふるまいの体系は「史実」として実証的にあきらかにされてきている。だが、渋沢自身ではなく、「メタ史実」としての私たちの側のふるまいの体系、すなわち、再・現前化された渋沢を受け容れた上で、それについて解釈を

施してきたその様式・仕方の方へ、「実証」の眼差しを振り向ける歴史の問いの試みがなされてもよいのではないだろうか。

前置きが少し長くなった。本書は、さまざまな媒体の中に氾濫する、さまざまな再・現前化された「渋沢栄一」——それらのうちには、「日本資本主義の父」のように常識的なものもあれば、一方で『帝都物語』の勝新のパフォーマンスのように少々グロテスクなものもあり、また本書所収の木下直之論文で紹介されている「ゆるキャラ」のように少々キツチュなものもある——、その形成を、渋沢栄一についての私たちの〈記憶〉と〈記録〉の相互作用としてとらえ、現在までのその軌跡をたどるために編まれたものである。

本書を編む動機の一つとしては、近年の渋沢栄一ブームということがある。我田引水になってしまいが、前出村論文では、バブル崩壊、リーマンショックを経たこの二〇年ほどの日本社会一般に、渋沢に対する情報需要Ⅱ関心が高まってきたことが客観的なデータをもつてしてあきらかにされている。もちろんブームとは言っても、同時代人と比較した場合の渋沢は、少なくともビジュアル面での知名度は依然としてあまり高くはないだろう。映画・テレビドラマ・芝居などでの登場頻度、および「顕彰するために、本人に似せてつくられた彫刻」（木下論文）としての銅像のポピュラリティという点で、「西郷さん」にはおおよぶべくもないし、また、ならば称されることが多い福沢諭吉、個人的にかかわりが深かった伊藤博文、といった新旧・お札の「顔」達ほどには、渋沢のそれは世間には流通していない（それゆえ『帝都物語』の異形の勝新も違和感なく受け入れられるのかもしれない）。だが、中村論文が指摘しているのは、いわゆる「失われた二〇年」に対する危機感、焦燥、反省などが人びとをして、「日本資本主義の父」の思想と実績を真摯に、切実に参照せんとする欲望へと駆り立てている状況であって、そこには日本近代史上の「著名人」「偉人」への通俗的な憧憬のレベルを超え出る何かがたしかにある。そしてこの、「今、渋沢栄一に学べ」というがごとき欲望は、大衆としての人びとだけではなく、歴史学を中心とする制度的な

知の領域をも侵犯しつつあるのだが、本書の目指すところは、倫理道德や人生訓と結びついた実践的関心の翼賛でないのはもちろんのこと、過去の~~実存~~そのものとしての~~渋沢~~についての科学的探求に与することでもない。後者にかんしては、尊敬すべき優れた実証的研究がすでに数多く提出され、蓄積されてきている。けれども、~~実存~~を過去から現在へと運び入れてくる権力装置、平たく言えば、「ブーム」を可能にしたものへの問いは残念ながらほとんど欠落しているように思われるのである。

そこで、そもそもなぜ今、私たちは、いかにして「偉人・~~渋沢栄一~~」を知りえているのだろうか、という冒頭の問いに立ち戻ってしまう。だからこそ本書は、「ブーム」への「同化」ではなく、その「異化」をゆるやかに目指すのである。

二 本書にとっての〈記憶〉と〈記録〉、あるいは「文化史」

本書は、市井のいわゆる「~~渋沢ファン~~」達、あるいは「~~渋沢栄一~~とその時代・周辺」に取り組む研究者達だけのために書かれ、編まれたものではない。限定された読者層、閉じられた共同体にあてて発信される顕彰的書物ではけつしてなく、過去と現在の対話一般に関心を抱く広範な層に知的刺激を与え、裨益するという公共的な企図をこめた書物である。そのことの再確認の意味もこめて、以下、本書に冠した二つのタイトル―概念について、簡単にコメントしておこう。

※ただし、〈記憶〉と〈記録〉、あるいは「文化（史）」は、学域を超えてきわめて論争的な――それゆえに刺激的な――概念でもあり続けている。以下の「コメント」―見解も、「公共的な企図」とは矛盾するが、歴史学以外の領域を知悉しているわけでもない筆者（平井）の臆断に近い認識に究極的には依拠しており、したがって、出自を異にする「知」を結

集した本書の総意からは逸脱する個所もままあることを予めお断りしておきたい。

《記憶》と《記録》についての覚え書き

ナマの渋沢栄一そのものではなく、渋沢栄一についての《記憶》と《記録》、ということ——だが、そもそも《記憶》と《記録》とは何か。またそれぞれどう違うのか。

そこでまず、議論の根源的な出発点として、《記憶》については、身体に内在化されている過去についての「情報」、《記録》については、身体の外部において文字などなんらかのメディアによって成形化されている過去についての「情報」、という定義を、筆者の責任において与えてみよう。⁽³⁾しかしこの定義には少しく注釈が必要だ。周知のとおり、「失われた二〇年」は奇しくも「記憶」が知の世界を席卷した時代でもあった。そして歴史学、とりわけ近現代史の領域にかんしていえば、この「記憶」への熱狂が、「民族」「国民」「国家」といった概念群のフィクション性、物語性への自覚と深くかかわっていることも周知のことであろう。ただし、この研究潮流で「記憶」に對置されてきたのは、「記録」ではなく、主に「歴史」であつた。すなわち——「記憶」は身体的であるがゆえに、文字以前に留め置かれた、有機的で不安定な存在である。その不安定さは、記憶の一次的主体⇨個人のうちはもちろんのこと、無数の個体が蜚集する《共同体》のうちにも矛盾・ゆらぎ・葛藤を惹起する機制、いわば記憶たちの抗争の可能性を常に伏在させているのであつて、そのような非理性的な記憶を統御することによって、共同体の安寧をはかるという、権力的な言説として召喚され続けてきたものこそ、共同体の来歴を、科学に基礎付けられながら物語る制度、としての歴史学にはかならない。したがって歴史学は、さまざまな差別や排除の契機を内包した共同体の暴力と共犯関係にあり、またその「学」のアウトプットであるところの「歴史」は、「過去」という他者を馴致し、抑圧する理性である——そのような自省・自戒の渦の中で、「記憶」／「歴史」という問題系が立ち上げられてきたのである。⁽³⁾

だがこの問題系においては、「記録としての記憶」⁽⁴⁾あるいは「記憶のかたち」⁽⁵⁾といった表現に示されるように、「記憶」(memory, memoire) 概念は少々広義に把握され、それゆえ「記録」(record) 概念は「記憶」と対等であるよりも、むしろ下位範疇として取り扱われてきた一面もある。「記憶」／「歴史」をめぐる知の諸蓄積はきわめて豊かであり、それらに多くを学んでいきたい。しかし、多くを学びつつも、過去をいま・ここに伝達してくる情報群における身体性や物質性という規準に重きをおけば、非理性／理性、被抑圧／権力の境界は、「記録」／「歴史」だけでなく、「記憶」／「記録」のあいだにも設置されて然るべきだ、と筆者は考える。先の定義にしたがって、「記憶」と「記録」とを明確に腑分けし、両者を対等に向き合わせてみよう。⁽⁶⁾その上で、権威的な制度として君臨する「歴史」へと至り着く前段階における、「記憶」と「記録」——後者のうちのあるものは史料などと呼ばれ、またあるものは銅像や写真などと呼ばれ、さらにあるものは歴史文学などと呼ばれる——、この異質なものの二つをぶつかり合い、溶け合いの中で、「渋沢栄一」が変容してきた過程を、パノラマ図のごとくトレースしていくことを本書では試みてみたい。

「文化史」についての覚え書き

本書では、「文化」については、クリフォード・ギアーツの「象徴に具現化された意味のパターンが歴史的に伝承されてきたもの」⁽⁸⁾という文化人類学的定義に筆者なりの再解釈を加え、簡略化することにより、「意味(するもの)の積み重なり」という定義を与えたい。したがって、過去のある対象についての「意味」の変遷を追跡してみようとした場合、そうした知の営みは「文化史」と呼ばれてよいはずだろう。先述の表現をくり返すと、「メタ史実」としての私たちの側のふるまいの体系、すなわち、再・現前化された渋沢を受け容れた上で、それについて解釈を施してきたその様式・仕方の方へ、「実証」の眼差しを振り向ける歴史の問いの試み、をなそうとする本書に、「文化史」を冠するのはさほど抵抗なく受け容れられることと思う。フランス史家・二宮宏之の丹念で明晰な紹介

によって、「読解の歴史学」が日本の歴史学界で人口に膾炙するようになって久しいが、その方法的概念もまた、ここでの「文化史」に重なり合うものとしてよい、と個人的には考えている。

また一方、「記憶」は「記憶」へと連繫もされる。ある「記憶」の主体から別の主体へと、その所在を変転させながらしたかに生きながらえていく。すなわち、本書平井雄一郎論文で（ただし、批判的に）取り上げられている、山本七平による「渋沢栄一伝」中の「古老の話」のごとく、経験についての直接的な知覚によってではなく、なんらかの媒体を介在させた間接的な知覚を経て得られた情報が堂々たる「記憶」として了解され、認知されてしまう事態、いわば「純粹記憶」から「記憶の記憶」が派生・分化していくような事態もありうるのである。⁽⁹⁾ そうなると、最終完成品として再・現前化された「渋沢」だけでは不十分だ。過去へ遡行する旅の途中で偶々出会う、不定形で混沌とした、渋沢をめぐる「記憶」群、それらを一つの完結した世界として、そこに現象している意味を読解することも、本書における「文化史」の作業には当然含まれるだろう。

では、なぜ、渋沢栄一などという「偉人」——著名人にしてエリート層であることが通常は含意されているところの——なのか、についても一言しておかなければならない。というのは、日本近代史研究の文脈にかぎった場合、一九八〇年代に一大潮流をなした社会史のムーブメントは実は、それ以前において独自の領域を確立し、影響力をふるってきた民衆史の研究者達によって——当事者達の意図は別として——その核が担われ、そして一九九〇年代半ば以降、そのいわば「ネオ・民衆史」としての社会史の問題意識と方法論を受け継ぎながら発展的に分節化されてきたものこそ文化史にほかならない、という史学史の見取図があるからだ。⁽¹⁰⁾ 民衆史／社会史／文化史とは、「偉人」達の「事件」の「物語」で構成される「政治史」からは明瞭な距離を置き、むしろ、かならずしも著名人とはかぎらない、ノン・エリートとしてのミドル・クラス・ロワー・クラス、マイノリティ、被差別者などの「生」や「心」の「構造」に主たる焦点をあてる知の営為、ということになる。このままでは、「文化史」の中での「偉人」は少々居心地が悪い。

もちろん、歴史学研究の一般論としては、「すべての歴史は文化史である」⁽¹²⁾という言明もある。しかし、ここでは、「偉人」渋沢栄一を「主語」として「事件史」的「政治史」を物語ろうとするのではけつしてないことをあらためて確認・強調しておきたい。あくまでも、「主語」ではなく「目的語」としての渋沢栄一から発現してきた「意味」の群れを、人びとが受け容れていく心性について、「構造」的に「読解」しようというのである。その側面において、この「歴史」研究は、民衆史／社会史の方法により親しいはずだ。民衆史／社会史にあらたな視点を付け加えることにより、それらを再活性化することへの寄与も期待できる、と信じた⁽¹³⁾い。

そうして、E・H・カーの有名な古典的テーゼ——「偉人とは、歴史的過程の産物であると同時に生産者であるところの、また、世界の姿と人間の思想とを変える社会的諸力の代表者であると同時に創造者であるところの卓越した個人である」⁽¹⁴⁾——を念頭に置きながら、主語としての「偉人」にも立ち戻ってみよう。たとえば、「偉人」とは、そもそもいかにして名指され、またそのようなカテゴリーはいかにして設定されるのか、というようなメタレベルの問いかけを携えながら、「渋沢栄一」という個性を「偉人」一般の中へ投げ返してみる、ということである。立ち戻り、投げ返してみるその時、「渋沢栄一」をめぐる「文化史」は「全体史」的な相貌も帯びてくるだろう。

三 本書の構成と内容

では以下、本書を構成する各論考について、その内容を瞥見しておこう。

「渋沢栄一」という意味は、肉体としての渋沢栄一がこの世界から消え去ったのち、渋沢栄一その人による統御はたしかに不可能なものとなったが、一方で、「その人」の遺産という側面もある。すなわち渋沢は、自身の思想と事績を（後世の）人びとに伝えていく作法にかんして、ある堅い信念を抱いていた。そこで、本書第一部では、その信念が、生前の渋沢栄一と接触があった者達にどのようなに継承されたか、すなわち、渋沢栄一という実存から、

渋沢栄一というイメージ・記号が離陸していく過程をたどる。

鶴見太郎論文「渋沢敬三による渋沢栄一の顕彰」は、伝記編纂事業についての栄一の思想が、事業後継者としての渋沢敬三によって見事に昇華されていた様相があらかにされる。民俗学者でもあった敬三が自身に課した役目とは、資料を徹底的に篤実に収集・分類した上で伝記作成者達に提供することに尽きるのであり、したがって「偉人」の首尾一貫した成功譚である「翁型」伝記の自家生産は否定され、事業は「伝記」ではなく「伝記資料」の編纂へと帰着することとなる。

佐藤健二論文「近代日本における「実業」の位相」は、渋沢栄一という「偉人」のイメージを決定的に規定している「実業家」―「実業」概念の地層を掘り起こすことにより、「自己と社会とを結ぶ修養の倫理」に支えられた、栄一の、「公共性」への確固たる志向を読み取る。この思想もまた敬三に着実に相続され、現実の空間内の施設として可視化されようとした。

高田知和論文「郷里からみた渋沢栄一」は、文書資料中心の歴史学、あるいは国家の中央から語られる「偉人」物語（鶴見言うところの「翁型」伝記）への控えめな批判の視点を盛り込みながら、「郷里の目線」でとらえられた晩年の渋沢の姿を描く。地方の産業振興という、郷里に遺された栄一の精神の痕跡に、私たちは今、観光資源のような〈記憶のかたち〉で接することもできる。

過去の実存と決別を果たしたイメージ・記号の群れは、長い時の中で、大量に生産され、社会の中に流通し、大量に消費されていくこととなる。また、十全には消費されえなかった、余剰物たるイメージ・記号は再び資本として投下され、あらたな生産・流通・消費のサイクルに組み込まれていく。そのような循環過程のダイナミクスを、さまざまなメディアを横断することによって探ろうとするのが本書第Ⅱ部である。

木下直之論文「二五人の渋沢栄一」は、近代日本の美術史・建築史をコンテクストとして、各地に散在する無数の渋沢栄一の銅像あるいは置物を総覧する。栄一の「魂魄を地上に留めるための新たな肉体」として意義づけられ

るそれらのうちの多くが、銅像の時代の終焉——「ゆるキャラ」が跋扈する——においても忘却を免れ、〈記憶のかたち〉として健在でありうるのは、「公共性」を把持する顕彰母体のたしかな支えによる。

身体を模写するメディアとして、銅像以上にモダンかつリアルで、さらに親しみ深いのは写真であろう。菊池彦論文「渋沢栄一、流通する肖像」は、被写体の人間的個性を描写する「ポートレート」／指示対象を欠いた記号であるところの「エフェジー」——この二つの対照的な肖像写真・肖像画の中にあられた「渋沢栄一」を考察する。そこであきらかになるのは、近代日本の流通市場を作り上げた栄一が、その一方で自身、肖像が流通する市場に投げ込まれた「商品」でもあったというパラドックスである。

文字メディアに目を向けよう。平井雄一郎論文「渋沢栄一の「事実／真実」から「存在の謎」へ」は、伝記・評伝・歴史小説の主役に据えられた「渋沢栄一」を読み解いてみせる。この「偉人」のライフストーリーは本来不条理で矛盾に満ちたものであったが、歴史家も作家もひとしなみに記録と詩を巧みに織り交ぜながら、〈物語・物語り〉という技法を駆使してテクストを再構成することにより、不条理や矛盾を透明化してきたのである。

渋沢栄一についての情報は、いわゆるマスメディアによっても大量に発信され続けてきた。それらについて、中村宗悦論文「イメージの収斂と拡散」は、一九二〇年代の新聞・雑誌などから、現代デジタル社会のネット空間にいたるまでを博捜し、その時代の経済状況とかかわらせながら丹念に分析している。「イメージ」におけるステレオタイプな不動の部分と、アクチュアリティに左右される流動的な部分とのコントラストが見事に剔抉される。

さて、〈記憶〉と〈記録〉に政治性がつきまとうのを避けることはできない。渋沢についてのそれらをめぐっても、軋轢や抗争の可能性が常に胚胎している、ということだ。だが、その軋轢や抗争も、誠実なアーカイブズという土俵の上で遂行されるならば、ルールの公正性は確保されうるであろう。渋沢栄一にかんする、できうるかぎり誠実なアーカイブズを真摯に築き上げようとしてきた人びとの努力の道筋を振り返るのが本書第三部である。

山田仁美論文「ブリコロールへの贈り物ができるまで」は、アーカイブズの核に位置する『渋沢栄一伝記資料』